

笹川平和財団

2024 年度 イラン研修報告書

早稲田大学社会科学部 4 年

古賀野々華

1. はじめに

本報告書では、筆者の研究課題に沿う形で言語の壁、歴史認識と和解、私自身の偏見に焦点を当て報告書を作成する。また、本報告書の内容は全て筆者の見解である。

2. テヘラン平和博物館で実感した言語の壁

まずイランの公用語、ペルシャ語が話せない事により体験した言語の壁について述べる。2月14日（火）イラン研修4日目の午後テヘラン平和博物館を訪問した。ここではイラン・イラク戦争で使用された毒ガスの被害者、Asadollah Mohanmadi さんのお話を直接聞く事ができた。戦争で使用された毒ガスはイラン人の体を蝕み、次から次に様々な病気を引き起こし精神的にも身体的にも被害者を半永久的に苦しめる事を学んだ。Mohanmadi さんは自分の体験をペルシャ語で話してくれた。私はペルシャ語が分からないため英語通訳を介してのみ彼の話を理解できた。通訳を介す事により被害者の想いや心の動きが削ぎ落とされているような気がして、被害者の方の本心を 100%汲み取れないもどかしさを感じた。ペルシャ語がわかったら彼の気持ちをもっと想像できたかもしれない。もっといろんな質問や言葉がけができたかもしれないと感じた。

ペルシャ語は英語やフランス語と比較して話者が少ない言語だが、テヘラン平和博物館で遭遇した言語の壁を通して言語の価値は「役に立つ」だけではない事を学んだ。言語は歴史や文化、価値観を反映する。話者が少ない言語でも、その言語を通してのみ接触できる知見や物語があると思った。

3. 歴史認識と和解

次にイラン滞在中に発見したイランの戦争に関する歴史認識について述べる。テヘラン滞在中、外交官養成学校 SIR (School of International Relations、以下 SIR) の先生から「アメリカは日本に2発の原子爆弾を落としたのに、なぜ日本はアメリカを許せるのか。」と質問された。先生は続けて、「イランではイラン・イラク戦争があったが戦争が終わってもイラク人が憎いと思う事があるし、許す事はできない。ロシアもイランの領土を奪った過去があるからロシアの事も許すことはできない。」と話していた事が印象的だった。

この質問を受け、私は原爆を落とされた事は過去であって、その過去の相手国を国

単位で憎むという視点がなかったと答えた。イラン人がなぜ過去の戦争相手国を戦争が終わった今も敵として捉えるのか。それに対して、日本はなぜ敵だったアメリカと今や同盟国として良好な関係を築けているのか。日本がアメリカに反感を覚えない背景は、歴史教育の中の平和教育があるからだと思った。小学校低学年から受けてきた原爆投下とその被害が中心の平和教育¹を振り返ると、それは戦争を2度と起こさないために「平和とは何か」について考える教育だったことがわかる。この教育が自分及び日本全体の日米の歴史認識を構築していると考え。原爆投下を命じたアメリカのハリー・トルーマン大統領の孫、クリフトン・ダニエル・トルーマンは朝日新聞の記者である田井中雅人とのインタビューで「日本人に真珠湾攻撃について謝罪してもらおうなんて思いません。それは謝罪ではなくて、和解とか理解といった問題ですから。」と、語っている²。彼が考えるように過去の戦争が現代の私達に残した使命は、互いの国がどのように和解しあい、良好な関係を築いていくかだと考える。イランでは過去の戦争の歴史についてどのように教育が行われているのか。そしてどのようにイランの歴史認識が構築され、イラン国内で共有されているのか。今回の研修でこの問いについてイランの人々と十分な対話ができなかった事が心残りとなった。

4. 私自身の偏見について

次に私自身の偏見について述べる。私がイランに滞在中に書いた日記の一部を紹介したい。

「イランに来てからもうすぐ1週間が経つ。イランという国は滞在すればするほど、どんな国かよく分からない。イランの政治システム一つとっても民主主義でもなければ社会主義でもない。」

日記を書いた当時私がイランをどんな国か「わからない」と形容したのは、23年間で自分が培った米国を中心とした西側諸国寄りの知見だけでイランという国を捉えようとしたからだと思った。今回のイラン研修を通して自分の考え方が大幅に西側諸国に偏っている事。そして物事を自分の知識内で何となく捉え、自分の都合がいいようにカテゴライズし、理解した気になっている自分の傲慢さにも気づく事ができた。物

¹ 平和教育には日本国内でも地域差が生じる。私が生まれ育った福岡県では長崎と地理的に近い事もあり修学旅行では長崎を訪問したり、夏休みの登校日には毎年平和学習を受けたり、他県と比較して平和教育を受ける機会が多かったと考える。

² 田井中雅人(2017),『核に縛られる日本』, 角川新書出版, 81 頁

事をカテゴライズすることでわかりやすく便利になることはある。しかし、カテゴライズする事は偏見の押し付けになり、理解しあったり、分かりあうことから人と人を遠ざからせ、結果的に社会そして世界に分断を生む要因にもなりうると思う。多かれ少なかれ人は誰しも偏見を持って日々を過ごしている。約2週間のイラン研修では何度も自分が偏見を持っている事に気づく瞬間があった。この研修を通して自分自身が偏見を抱いている事を認める事で、視野が広がり、物事をもう1段階深く考えられる事を学んだ。

5. 終わりに

実際に自分の足でイランの地を踏み、自分の目でイランを観て、現地の人と対話を重ねた体験は、本やインターネットを通して知るイランとは一味違う体験をすることができたと思う。イランでの体験とそこでの気づきを今後の自分の研究やキャリアだけでなく、他者や社会の発展のためにも活かしていきたい。そして日本とイランの良好な関係のために一個人としてできる事を模索して行きたい。

このような貴重な機会を与えてくださった笹川平和財団、そして SIR の皆様に感謝を申し上げます。

なお、本所感執筆者個人のものであり、笹川平和財団の見解を示すものではありません。